
バカとテストと召喚獣 ~ 忘れ去られた時 ~

琉叶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣〜忘れ去られた時〜

【Nコード】

N3856Y

【作者名】

琉叶

【あらすじ】

明久が自ら提案したパーティー。

そのパーティーでは色々な陰謀がうずまいており、明久の運命はいかに!?

最後の最後にはその日あった一日は明久の記憶のそこへと封印させられてしまう・・・
一体この日何があったのか

悪夢の序章（前書き）

一言断っておきますが・・・

ただのおふざけです！

だってアキちゃんかわいんだもん

とにかくアキちゃんが見たかったんだもん

そんな自己満小説に付き合ってくださいる方は・・・

どうぞ^^^

悪夢の序章

「ねえ雄二」

「なんだ？明久」

僕の呼びかけに答えているのは野性味溢れる顔をしている僕の友達である坂本雄二だ。

「提案なんだけどさ、明後日で夏休み最後でしょ？」

「ああ、明後日から学校があるな。まあ俺達は夏休みの間も今みたいに補習を受けに学校に来ているわけだが。で？それがどうした」

「明日さ、皆で夏休み最後って事でパーティーをしない？」

「なんだ、明久のくせして珍しく良いこと言うじゃないか」

「まあねえ、せっかくの夏休みなんだから最後の日ぐらい皆で盛り上がりたいたいじゃないか。幸いな事に明日は補習ないしね」

そうなんだ、僕らのクラスは何かと問題が多くて夏休みの間も今日みたいに補習を受けることがほとんどなんだ。だけどババア長もとい学園長の計らいで明日は補習免除となった。

「よし！その提案乗った！」

「ワシも乗ったぞい」

横から僕らの会話に入ってきたのはクラス一の美少女木下秀吉（男）。ちよつとした手違いで書類上（男）とはなっているが外見から心までちゃんとした女の子だ。あれ？ちよつと前まで男って僕は思っていたような・・・うん、きつと気のせいだ。でなければ僕はその時気の迷いを起こしていたんだ。だってこんなに可愛い秀吉が男であるはずがない！

「（ブルル）・・・なんじゃ、急に寒気がしてきたぞ」

「秀吉大丈夫？」

寒気がつてもしかして秀吉風邪気味なんじゃ・・・

「うむ、大丈夫みたいじゃ」

「そうか、きつと誰か可愛い秀吉の噂をしてたのかもね！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ねえ、秀吉はなんで青ざめた顔でこつちをみるの」

なぜだろう。僕は何か悪い事言ったかな？

「いや・・・気にするな明久よ。」

「ん？うん、分かったよ」

本当になんでこちらを見るといふより睨む形で凝視しているのだろう。秀吉に見られるとなんか照れるから恥ずかしいんだけど。

「……場所」

ここでちょうど土屋康太こと、通称ムツツリーニが話しに入ってきた。

「そうだね、場所は」

「そこ、良い度胸だな。俺の授業中に話をしてるとは」

「やばい！鉄人に目をつけられた！」

「……ガタツ……」

僕ら四人は同時に廊下へ出て走り出していた。

「逃がすかー！」

後ろで鉄人が常人のものとは思えない速さで追いかけてくる。あれは恐ろしい、まるで般若の面のような顔つきだ。

「明久！良い作戦がある！」

走りながらこちらを見て言う雄二。フフツ、今日は騙されないぞ！どうせいつものように僕を囮にしている間に自分はさっさと逃げるとい作戦だろう。

「俺が囮になっている間にお前達が逃げるんだ！」

「雄二……」

ああ、何てことだ、僕達の事を一番に思うなんて、雄二ごめん！
僕は雄二の事を・・・

「ドスッ」

「ガハッ」

僕が油断した際に雄二は僕に回し蹴りのプレゼントをくれた。

「雄二、貴様」

「吉井」

僕が今最も愛しい友の名を呼ぶのと、後ろで鉄人が僕の名を呼ぶのはほぼ同時だった。

「はぁー」

あの後、結局四人とも捕まり補習室送りとなった。

「明久君達はいつも私達の倍は補習をされていて大変ですね」

「わざわざ補習を増やすなんて信じられないわ。でも、明日皆でパーティーをするのは賛成ね」

僕達四人がため息を付いていると、姫路さんと美波がそんな話をする。

「そうだった。確かに僕そんな事を言ってたよね」

そうだ、そしてその後鉄人に追い回されたんだった。

「あんた自分で言ってたのに忘れてたのね・・・」

なんだろう、美波にすごいバカを見るような目で見られているよ
うな気がする。

「でどうするの？場所」

「明久の家で良いだろう」

「僕はそれで良いけどみんなはどうなの？」

「もちろん良いのじゃ」

「・・・・・・良い」

「私も構いません」

「うちも良いわ」

「じゃあ僕の家で決まりだね」

あと決めるとなると・・・

「誰を他に誘う？」

「翔子」

「雄二にしちゃ珍しいね」

「明久、前にも言ったと思うがもし、もしあいつを呼ばなかったら後がどうなるか・・・」

「っっ！そうだった。」

「ごめん雄二」

「いや、良い」

僕達はつかの間友情を確かめ合った。

「では姉上も誘って良いかの？」

「お姉さん？」

秀吉のお姉さんとはあんまり交流がない分思わず聞き返してしまっ
った。

「前に一度で良いから皆と遊んでみたいといっておったのじゃ。ワ
シの推測に過ぎんのじゃが、おそらく霧島や工藤たちとはよく遊ん
だりするのに自分だけそれがないのを気にしておるのではないかと
思っておるのじゃ」

言われてみればそうだ、今まで余り気にしていなかったな。

「そうだね、秀吉のお姉さんも誘おうか。ついでに久保君も誘おう

よ。二人には何かとお世話になってるから」

「そうだな、そのほうが良いな」

雄二も僕の意見に賛成してくれた。

そうやってしばらくの間は明日の事について話し合い、また明日会おうという事で今日は別れた。僕はこの時まだ何も知らなかった。明日起こりうる悪夢を予想していなかったのだ。

悪夢の序章（後書き）

「雄二」

「なんだ？」

「この話ってさ、五ヶ月前に作られなかった？」

「確かな」

「何で今まで本棚にしまわれてたんだろう？」

「作者がおおかた本棚にしまったはいいが、その後何処に置いたか分からなくなっただけのまま忘れていたんだろ」

「酷いね・・・」

「一応受験生だしな。気を使ってやろう」

「そだね」

「お前でも高校は入れたんだから作者も入ると思うがな」

「それどういう意味？」

「まんまに決まっているだろ？」

「・・・」

「・・・」

「「上等だぞらあー！」「」

夏休み最後の（前書き）

続きをどこに書いてしまったか分からなくなってしまった・・・
下手したら二ヶ月ほど更新できないかも・・・

ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！

夏休み最後の

今日は夏休み最後という事で、僕等いつものメンバー（霧島さんも含む）＋工藤さんと秀吉のお姉さんと久保君たち皆でパーティーをする事になった。って言うっても一番初めにそれを提案したのは僕自身だけだ。

僕は今、パーティー会場である自分の家で皆が来るのを待っている。

「そつだ、皆のコップとか用意しとかないと」

今日のパーティーはほとんどおしゃべりとお菓子、ジュースを飲む事だけが目的だからちゃんと準備しとかないといけなかったんだ。

コップをちょうど机に並べ終わった時に呼び鈴が鳴る。

ピンポン

「はい」

誰が来たんだろう。姫路さんが来たんなら嬉しいけど、来たのが雄二なら・・・止めよう、想像しただけで気持ち悪くなってきた。

カチャリ

「・・・・・・・・」

「明久、人の顔を見てそう嫌そうな顔をするな」

ガツカリだ。今日一番初めに会ったのが雄二なんて・・・そうやって落ち込んでいると雄二より少し高めの声が聞こえた。

「明久よ、何を落ちこんどるのじゃ」

「あれ？秀吉も雄二と一緒に来たの？」

「まあの、もちろん姉上も一緒じゃ。途中雄二とバッタリ会ったから、一緒に来たのじゃ」

「ふーん・・・」

許さん。雄二の奴、秀吉と一緒にここまで来たなんて羨まし過ぎる。明日あたり会長（須川君）達と共に雄二の奴を肅清せねば！

「明久、今何か考えたか？」

「べ、別に何も！」

「そつか？なら良いんだが」

鋭い。コイツは感までもが野生動物並みなのか！仕方がない、雄二の処分は明日まで考えないようにしておこう。出ないとこちらが肅清される事になりかねない。

「吉井君」

「あ、こんにちは。木下さん。」

「こんにちは。今日は私も誘ってくれてありがとう。とても嬉しいわ（ニッコリ）」

そう言っただけで微笑んだ顔はとても美しかった。本来ならば可愛いというべきなのだろうが、秀吉のお姉さんの顔は可愛いというよりも美麗と言った表し方のほうがしっくりくる。だから笑顔も可愛いじゃなくて美しいって言った方が正しいんだろうと僕は思う。

「木下さんに喜んでもらえて僕も嬉しいよ。でも迷惑なんかじゃな

「かった？」

「全然！本当に感謝してるわ」

秀吉のお姉さん達と挨拶をしていると、いつの間に来たのか、雄二の後ろに霧島さんが立っていた。

「……………雄二、一緒に行くって言った」

雄二はその声でようやく霧島さんが来たって事に気が付いたみたいだ。ああ、今でも理解しがたい。霧島さんほどの人がなんでこんなブスで乱暴で性格や成績までもが最悪な奴の事を好きなのか。世の中には不思議なことが満ち溢れすぎている。しかも雄二ときたら霧島さんに対して冷たい態度ばかりとって。好きなら好きで素直になれば良いのに。明日会長に報告する事が増えたな。明日が楽しみだ。そんな事を考えていると横で悲鳴に似たようなものが聞こえていた。

「ま、待て、落ち着け翔子」

「……………ゆるさない」

「ぎゃああああああ」

「うるさいね。まああんなのはほっといて秀吉と木下さん、遠慮しないで中に入って。ここじゃうるさくて仕方ないから!」

雄二の声なんか聞いていても何の特にもならないからね。

「そうじゃな」

「あんた達、酷いとは思わないの?代表も代表だけど・・・」

「「え?何が?」」

「一体何のことなんだろう?誰の事を酷いって思う必要があるんだろう。雄二?なわけないな。」

「Fクラス代表が哀れに思えてきたわ」

「へ、今なんて?」

「いえ、何でもないわ」

「?そう」

何のことだったんだろうか。

「やあ、皆早いね。ボク達が最後だったかな?」

「吉井君。今日は僕も呼んでくれてありがとう」

「工藤さんに久保君!そんなことないよ、まだムツツリーニが来て
ないし。久保君たちにはいつも何だかんだ言っても結構助けられて
るから当然の事だよ」

「この前の林間学校の時にも久保君には手を貸してもらったから、
こんな事で喜んでくれるならこっちも嬉しいよね。でもムツツリー
ニは遅いなあ・・・って」

「ムツツリーニ」

「・・・なんだ」

「いつの間に僕の家に入ってたの?」

「……………秘密」

油断した。工藤さんたちと玄関で話してる間に進入されたんだ！しかも……誰よりも先に僕の家へ侵入！宝探しを終えるなんて！あそこに入れていた宝が盗まれているのはほぼ確定した。次からは気をつけよう。

「それじゃ改めて。みんな入って入って！」

「……………おじやましまーす！……………」

「それじゃっ、皆集まった事だしパーティーをはじめよう。かんぱーい……………」

「『『『『『『『『かんぱーい！』』』』』』」

とりあえず人数がそろったからパーティーを始めたけど。さすがにこの人数だと・・・

「この家も窮屈に感じるものなんだね・・・」

普段一人暮らしの僕だけだったらかなり広いと思ってたんだけど・・・なんだか少し残念な気がするなあ。

「だな。俺たち二人でもまだまだ広いと思ってたんだがな。この人数だとこの家も小さいんだと錯覚しちまうな」

雄二の言ってる錯角というのはどうだろう。確かに狭くないとは思ってはいるけどそこまでこの家が大きいとも思えない。

「それに夏休み最後だからって言うてもまだまだ真夏日だからな。こんな大人数が一箇所に集まっていると・・・」

「・・・暑苦しい」

「うむ。確かにこれでは暑くて仕方がないの」

うん。ムツツリー二と秀吉の言うとおりこれじゃサウナに来てるのと変わらない。エアコンでも付けないと体が持たない。できれば今月の新作ゲームのために節約をしたかったんだけど。でも皆が楽しくパーティーをするためには仕方ないよね。今日から今月の食事は水だけになりそうだ。大丈夫。人が生きていくために必要な三大栄養素は水・酸素・二酸化炭素だから何とかなる。水は雨が降れば水道が止められても摂取できるし、酸素と二酸化炭素は常にそこらに漂っているから全然生きていくのに支障はないはずだよな。

ピピッ

エアコンのおかげで心地よい風がリビングに吹き抜ける。

「なんだ明久。エアコン付けたのか。お前の事だからゲーム代のためにケチるのかと思ってたぞ」

「僕と雄二だけならそうするんだけどね。今回は姫路さんや美波、他にもたくさんの方が来てるから」

「なるほどな。お前にしっちゃ珍しいと思ったが姫路たちのためって言うんなら納得だ」

当たり前だ。雄二のためだけに僕らの生活（ゲームに囲まれた樂園）を邪魔されてたまるものか。

「涼しいですね」

「そうですね」

「……暑いのは苦手」

「確かに少し暑すぎたよね」

「うん。少し暑かったから助かるわね」

良かった。皆にも喜んでもらえてるみたいだ。

「うむ。涼しくて助かるぞい。あのままでは汗がすごいので上を脱ごうかと思っておったがこれでその必要はなくなったの」

エアコンを付けるのをもう少し遅らせればよかった！秀吉が自分から肌を出してくれるなんて滅多にないチャンスだったのに！

僕はなんて事をしてしまったんだ。ムツツリー二なんかあそこの物陰で血の涙を流してるじゃないか！

「……………（明久）」

やばい。「……………明久、許さない！」ってムツツリー二の目が言っているように見える。これではムツツリー二商会から秀吉の写真が入手困難になるかもしれない。しかたない、早めに手を打つしかない。

「ねえムツツリー二」

「……………なんだ（許さない。殺す）！」

（ゾッ）なんだろう。今ものすごい悪寒が……………うん。きっと気のせいだ。それよりもムツツリー二を！

「一週間ほど前にとってお気のお宝を入手したんだけど……………」

「……………願いはなんだ」

よし。買収完了。ムツツリー二は本当に扱いやすいな。僕の最後

のお宝は犠牲になったけど・・・これで秀吉の写真が手に入るなら
安いもんだよね。

時間は少し流れて僕達いつもの四人は学校の話しに入っていた。

「それにしても明日から本当に学校なんだよね」

「それがどうした」

「いや。明日からまた鉄人と毎日顔を合わすんだと思うと何か気が
重くなって」

「そうじゃな。そう思うと少し気が重くなるの」

「・・・まったく」

「二人はまだ良いよ。僕なんか雄二のせいで必要以上に鉄人に捕ま
ってるんだから」

「それは俺のセリフだ」

「何言ってるのさ！雄二のせいで僕は毎日のように補習室贈りにな

るんだ！」

「それは自業自得だろ」

「うっ」

それを言われればそうだけど。でも、でも雄二のせいで僕だけ補習室送りになってる時があるのが納得いかない。雄二だって僕以上に悪い事しているはずなのに。いつもいつも僕を身代わりにして。

「雄二だって僕と同じぐらい悪い事してるじゃないか！」

「お前よりはマシだ」

「いつも僕を身代わりにしてるくせに」

「簡単に俺の罠にはまるお前が間抜けなだけだ」

それはひどい言われようだ。よし、こうなったら雄二には少し、ほんの少しだけお仕置きが必要だね。

「雄二」

「なんだ、バカ久」

「昨日は補習を抜け出して誰と会ったの？もしかして霧島さん？」

「何を言ってる。俺は昨日翔子と会う予定などこれっぽつ……」

「……雄二、ちよつとこつちに」

「うあああああああ！」

ゴキグキゴキゴキッ（足の圧し折られる音）

「やめろ、翔子！俺の足にそんなことをした人体に悪影響っ！」

「……言い訳は聞かない」

メシリッ!

「っっっっっっっっ!」

「………向うで詳しく教えてもらっ

バカめ!これではらくはこっちに戻って来れないはずだ。それにしても……

「やっぱり雄二が傷つくのを見ると気持ちが良いね!」

いつもコケにされるだけなんてまっぴらごめんだもんね。

「明久よ。お主は本当に『M』なのか?わしには『S』にしか見えぬぞ。」

「何を言ってるの、秀吉?僕のサイズは『L』だよ?」

「いやっ……なんでもないのじゃっ!」

秀吉は何が言いたかったんだろう。僕はMに間違われる事はあつ

てもSって言われた事はないのに・・・

もしかして秀吉は・・・

「秀吉」

「なんじゃ」

「このすぐ近くにすっごい激安の眼科あるから紹介するよっ」

とても目が悪いんだ！

「明久よ。お主は色々と誤解しておるぞ」

「何のこと？」

「なんでもないぞ！それからわしは眼科に行かずとも両目ともAじやぞ」

「そんなはずないよ！だってこの僕が『S』だなんて目がおかしいとしか考えられないじゃないか！」

「先ほどのことは忘れてくれ。わしの不注意じゃ」

「？」

「良いから忘れるのじゃ！」

「う、うん。秀吉がそこまで言っなら良いけど・・・」

どうして秀吉はあんなに慌ててるんだろ？

「でも、ふと思ったんだけど・・・」

「なんじゃ」

「・・・・・・？」

「鉄人って僕だけをなんであんなに目の敵にするのかな？」

あんなに僕だけ怒られるのは絶対おかしいと思う。

「僕じゃなくて雄二って言うなら納得いくのに・・・」

「そう思ってるのはお前だけだ」

「雄二。今回はやけに早かったね。もう終わったの？」

「おかしいな？少なくとも後十分は戻ってこられないと思ったのに・・・残念。」

「あー。どっかのバカのせいで左足一本の感覚がないがな」

「それだけですんで良かったんじゃない？」

それはそれとして、雄二にそんなことを言われるのは心外だ。秀吉たちになら納得できるが、雄二にだけは絶対言われなくなかったな。

「お前、俺にだけは言われたくないとかって考えたろ？」

「！」

するどい・・・

「そう思っ
てんなら秀吉とムツツリー二にも聞いてみるよ」

雄二め、墓穴を掘ったな！秀吉たちならきつと僕の味方を・・・

「僕は青天白日、目の敵にされるほど目立った行動をとってないよね？」

「……………(フイツ)……………」

目を・・・目をそらされた！そんなバカな！この僕がそんな・・・

「まっ。そういうことだ」

なぜだろうか。僕は今とてつもなくバカにされている気がする。

「明久君をそこまでバカにするのはひどいです！」

「ひ、姫路さん……………」

僕達の会話に割って入る姫路さん。もしかして僕のフォローをしてくれようとしているのかな？それならとっても嬉しいよ。

「た、確かに明久君は普通よりもかなりおバカで鈍感で貧乏くじばかりを引いて乙女心にも鈍すぎなところもありますけど！……」

「……。天国から地獄の底に突き落とされた気分だ。僕は自分で思っている以上にダメな人間らしい。」

「……明久君は常に一生懸命に行動しているのでそこまでバカにするのはひどいです！」

「……姫路さん。さっきの言葉の後じゃそのフォローも無きに等しいよ。」

「瑞希の言う通りよ。確かにアキの鈍感な所はたまに傷だけど、良いところもたくさんあるわよ！」

美波は何を言うつもりなんだろう？もしかして僕を庇ってくれるのかな。それともやっぱり僕をけなすつもりなのかな。

「ほう。例えばなんだ」

「え……つと、人のために一生……懸命になれるところ……とか……」

俯いてそういう美波が女の子らしく見えてきた。そうか、僕は今まで美波を悪く見過ぎて

「進んでサンドバックになってくれ……る……所……とか」

いなかったみたいだ。僕は美波には人として見られていないようだ。それに進んで僕は今までサンドバックになったことは一度もない！さすがにちよつと傷ついた。

「後は……」

まだ言うのか！もう勘弁してくれ！僕の精神はこれ以上持たないから。

「……」

変だな。中々次の言葉が出てこない。何を勿体付ける必要があるんだろう。そこまで勿体付けなくても良いのに。僕としては一気に言ってもらった方がまだ心の負担が少なくて嬉しいのに・・・

そうか！さすがに僕の短所はもう出て来ないんだ！だから言いたくてもいえないんだ！

「女装が似合うところかなっ」

「・・・」

ああ、それはと止めだよ美波、これはかなりの大ダメージだ。

頭の中が真っ白になって・・・いく・・・

「・・・島田」

「何？」

「明久がお前の一言を聞いて真っ白な砂になっちゃまってるぞ・・・」

「！」

「！」

「！」

「あ、明久君大丈夫ですか！」

「アキ、しっかりして！」

「吉井くん大丈夫かい!？」

遠くで声が聞こえる・・・

きっとこれは気のせいだろう・・・

ドタバタ・・・

「秀吉、あんたはあの中に入らないの？」

「うむ。わしが入っても何も変わらぬからな」

「そう・・・でも、吉井君は大丈夫かしら」

「いつもの事じゃから心配する事はないぞ、姉上」

「………日常茶飯事」

「だな」

「………優子、大丈夫」

「代表がそう言つたら……」

「………うん」

「………ん、あれ？」

「僕は何をしてたんだっけ？」

「目が覚めたのか明久」

「雄二。僕は確か・・・」

ダメだ、ついさっきの出来事のはずなのに全く思えだせない。

「お前は美波の一言で砂になったんだ」

「そうだった！じゃああれから・・・」

「一時間たった」

「そんなに・・・」

「ああ」

ん？なんだか雄二の様子がおかしいような・・・うん。きっと気のせいだ。

この時、雄二の様子を少しでも気に留めていたら、この後の悪夢を回避できたのかもしれない。だがこのときの僕はそんなことをちっとも知らないでただただみんなと楽しく過ごしていた。

夏休み最後の（後書き）

感想よろしければお願いします。

後アドバイスとかも・・・

出来れば出よいので、待ってます。

休載報告

すみません。

こちらの方に断りを入れておくのを忘れていました・・・

ただでさえ更新をまったくしていないというのに、これから四月まで休載させていただくこととします。

私一応受験生なのですが、まったく勉強をしていなかったためにパソコンを母に没収されてしまい・・・

今も技術の時間を脱線して投稿しているしだいにございます・・・
ほんとうに勝手なこととは思いますが、四月の間までお待ちください。

正月あたりには一度投稿できるかも知れません。

あくまで可能性ですが・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3856y/>

バカとテストと召喚獣～忘れ去られた時～

2011年12月13日10時51分発行